
けいおん！ Another Story SS

I,K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ Another Story SS

【Zコード】

Z8918R

【作者名】

I・K

【あらすじ】

大変長らくお待たせ致しました！

この作品は、以前から企画していた『けいおん！ Another Story』の短編集です。

基本的にはストーリーとはあまり関係のない短編を掲載しますが、時にストーリーの補完となるエピソードを掲載する事もあります。

本編以上に不定期更新になるかもしれません、どうぞよろしくお

願
い
し
ま
す。

大切なものの、それは希望（前書き）

作中時系列：#26 ラストシーンの直前

籠球編での剣臣の入院中の出来事についてのお話です。

それでは、どうぞ！

大切なものの、それは希望

本日、十一月二十一日。あれから そう。近藤たちとの一件があつてから、既にもう一ヶ月が経とうとしていた。

今の時刻は……だいたい十時位なんだろうか。これ、普段なら学校にいるような時間なんだろうけど 残念ながら、今いる場所は学校ではない。

それならば、ここには一体何処なのか？

答えは至つて簡単、ここは病院だ。

そう。近藤たちとの一件で、俺は本当に殺されかけた。なんでも主治医の話によると、どうやら一週間くらいずっと意識を失つていたらしい。

事実、俺もあの世界での出来事がなかつたら いや、あの天使みたいな女の子の前ではつきり『生きたい』と言つてなかつたら 今頃、俺は間違いなく“この世”にはいなかつたんだと思つ。

……とまあそんな俺も、どうにか傷も完治したという事で、今日をもつてやつと病院を退院する事になつたつて訳だ。

その病院の入口にある自動ドアが目の前で開かれると、そこから差し込んできたのは……まるで十一月とは思えないような、そんな暖かい日差しだった。

「どうだい、久し振りの外の空気は？」

ふと自分の後を歩いていた、今回の件の主治医に声を掛けられていた。

外の空氣…… そういえば、いつやつともに外に出たのは久しぶりかもしれない。

けれども……

「久しぶり、でもないですよ」

けれども、俺が入院していたこの一ヶ月の間、一度もこの病院から外に出なかつたつて訳でもなかつた。

「そうか？ でも、君に外出許可とかを出したような覚えは無いんだが……」

「そりゃあ外出はしてませんからね」

「ならいいんだが…… 一体どうしたんだ？」

「いや、ちょっとな」

俺は入院していた間に、一度だけ病院の外 といつても、敷地内にある中庭のような場所なんだけど に出ていた。

それは、この一ヶ月の間に何度もお見舞いに来てくれた姉貴や唯たちに連れられた訳ではない。

でも、たまたま外に出たという訳でもないと自分で思つてゐる。何故なら、それは……

あの二人と出合つたから、なんだろうからな 。

それは、俺の意識が戻つてから数日が経つたある日の事だつた。

何もする事がない。

こんな身体じや、まだ何も出来やしない。

それに、何もする気が起きない。

あの頃 そう、警察やら学校やらの事情聴取を受け続けて疲れ果てていた頃の自分は、そうやってただ暇を持て余しているだけの、まるで怠惰な時間を送つていた。

けどあの頃の俺でも、決してそれを良いとは思つていなかつた。

けれども、そこから知らぬ間に逃げ出してしまつ。

そういう自分もまた、心の中にいた。 そんな中、リハビリからの帰りに通つた廊下で、俺はたまたまその一人に会つたんだ。

……といつても、最初は

『いてててて……わつ！』

『もう、走っちゃダメでしょ！？ 危ないんだから……あつ、『ごめんなさい』

いきなり男の子の方が俺に向かつて突つ込んできただけ、なんだけどな。

……とまあ、いきなり俺の前に現れた一人は、見た感じ姉弟のようだった。

年は一人ともだいたい小学生くらいか。 その辺はよく分からないが、その格好からして多分一人とも俺と同じようにここで入院しているのだろう。

『こら、陸斗りくとも謝つて！』

『はいはい……ごめんなさい』

わざとじやないとはいえ、隣にいるお姉さんらしき人に諭されて謝る陸斗君（多分弟か？）。

とまあ、そうこうしている内に

『それじゃあ、これで失礼します。 ほら、陸斗も行くよ』

『言われなくとも分かつてるつて！』

一人はあつという間に、そこから立ち去つてしまつた。

『ま、いいか……』

そんな二人をふと一瞥して、俺もまた自分の病室へと歩き始めていた。

初めて会つた時、あの一人の事はただの元気な姉弟だとだけ思つていた。

何の偶然か、その後も何回かあの一人には会つたけど、初めて会つた時と同じように、ただぶつかつてしまつたり、とまあ、そん

な感じだった。だから、あまりお互いに話したりもしなかった。

けれども、あれから数日後

『おっ、兄ちゃんいたいた！』

『あの～、突然お邪魔してごめんなさい』

まだ名前も知らないはずなのに、なんと二人は……

『何かの間違いや、ないよな……』

俺の病室に、やつて来ていた。

『何言つてるんだよ？ オレらは兄ちゃんの所に来たんだぜ？ な、^{みく}未来？』

『こり、そんな言い方じや失礼でしょー？ ほ、本当に『ごめんなさい』……』

『い、いや……別にそれはいいんだけど。それより、一体俺に何の用だ？』

何だか俺の知らない所で話が勝手に進んでるような気がするけど……ともかく、俺はそんな一人にちょっと尋ねてみる事にした。

一体どうしたのか、と。

すると、返つてきた答えは……

『そ、それは……』

『に、兄ちゃんがちょっと元気なさそうだったからな。オレと未来とで何か出来ないかな～、つて思つてさ』

『う、うん。それに、私たち……』

『あ～っ！～ それ言つちゃダメだろ？』

『そ、そつか』

『とにかく、要是そういう事。何か他に聞きたい事はない？』

自分でもビックリするような、こんな答えだつた。

元気なさそう……言われてみれば、実際そうなかもしけれない。

何もする気は起きないし、最近は自分でもあからさまに分かるくらい怠惰な生活を送つてるんだと思う。

それを、今初めてまともに言葉を交わしたこの一人に見抜かれて

るとは……情けないのかその逆なのか、とにかくビビりか複雑な気分だった。

けれども……

『いいのか、俺なんかの為に』

『だから、いいんだって！ オレ、元気でいっぱいに…』

『う、うん！』

改めて考えてみると、ちょっとばかり嬉しかった。

『でも、オレらにはもう時間が無いんだ。オレらから兄ちゃんにはこれくらいしか出来ない。……だから悪いけど、明日の朝に病院のロビーに来てよ。見せたい物があるからさ』

『あ、ああ……』

『ぜ、絶対だからな！』

『もつ、そんな風に言っちゃダメだよ……。』めんなさい、でも見せたい物があるのは本當だから……だから

『分かつたよ、二人とも』

何故かは分からぬ。けれども……

『……じゃあ明日の朝、ロビーでいいんだよな？』

いつの間にか、俺は一人にそう言つていた。

『ああ、約束だぜ！』

『それじゃあ、よろしくお願ひします。陸斗、行く？』

一人はそう言つと、お互いに手を引かれ引きつり俺の病室を出て行つてしまつた。

『明日の朝、見せたい物がある……か』

そんな二人の出て行つた後を見ながら、思わず呟いていた言葉。一体何を見せてくれるのか……心のどこかで、それを楽しみにしてる自分がいた。

そして、翌朝。

『おっ、兄ちゃん。来た来た！』

『おはようござります』

昨日一人に言われた通り、俺はこの病院のロビーへと足を運んでいた。……どうやら、少し待たせてしまったみたいだ。

『悪い、遅くなつて』

『いいつていひつて。さて、じつちこひ』

陸斗君にそう言われ、俺は手を引かれるようにして何処かへと連れていかれた。

『そういえば……見せたい物つて、一体何なんだ?』

『それは……見てのお楽しみです』

『ま、見りや分かるつて!』

ここは病院の中。それにも関わらず、ロビーの中、長く続く廊下を駆け抜け、俺たち三人はひたすら“見せたい物”の元へと向かっていた。

そして、そうやつて走ること数分。

『なあ、見せたい物つて……』

『そう。これだぜ』

『綺麗でしょ?』

病院の裏口らしき場所から一歩外に出る。すると、開けたその視界に広がっていたのは……

『凄いな……これ』

今は十一月。なのに、青々とした葉が生い茂り、朝の光にせらざれて輝いているように見える。そんな、まさにそこにあるのが“奇跡”と言えるような、堂々とした大木の姿だった。

それを見た瞬間、思わず俺は言葉を失つていた。

……凄い。何がどう凄いのかは言葉には出来ないけど、とにかくその言葉一つしか浮かんで来なかつた。

『なあ、兄ちゃん』

そんな景色に見とれていると、右隣にいた陸斗君がふと声をあげていた。

『兄ちゃん、オレら……実は、兄ちゃんの事情、知つてたんだ。この間、兄ちゃんの身に何があつたのか、全部知つてるんだ』

『だからね……私たちにも何か出来ないかな、って。あなたの事を……あなたがこの病院に入院している事を知つてから、ちょっと考えていました。そしたら、その時に……』

『ちょうど、この木の事を思い出したんだ』

それに続くように、未来ちゃんの方も声をあげていた。

『そうか。俺の事を知つていて、元気付けようとしていたのはそういう事だったのか。』

『そうか……一人とも、本当にありがとな。でも、なんで今日の朝じゃなきや駄目なんだ?』

でも、それじゃあなんで『時間がない』なんて事を昨日言つてたのだろうか。

何故今日の朝じゃなきや駄目なのか。

それを、聞いておきたかった。

そして、その答えは……意外な物だった。

『そ、それは……』

『私たち、実は今日でここから他の……もっと大きな病院に移る事になつてるんです。私たち、実は双子なんですけど……こ'うやつて見た感じは元気に見えるかもしません。けれども、実は生まれてからずつと……大きな病気で、一人揃つて入院しているんです。』

……そう、一人は生まれつき大きな病気を患つていた。

二人を治療するお金の為に、両親も共働き。それで、いつも二人だけだつたそうだ。

俺の事は本当にたまたま知つていただけだそうで、この木はそんな一人の、大切な宝物の光景だそうだ。

俺はこの時まで、ずっと心のどこかでウジウジとしていた。

折角こうやって意識を取り戻し、傷とかも徐々に治つてきているのに、この一人のように、生きてるのが精一杯な子とかだつていいのに、俺はずつと燻つていたのかもしれない。

けれども、今は違う。

この木に、陸斗君と未来ちゃん。今ここにあるこの光景を見てい

たら なんか、そうやっていつまでもウジウジして居るのが、馬鹿らしくなってきた。

あの時、俺は生きるチャンスを貰つたんだ。
だからこそ

『一人とも、本当にありがと』

やつと、生きる意味を見つけられた。

大切な事が、少しだけ分かった気がした。

そうさせてくれたこの一人と、目の前の“奇跡”に

『本当に、ありがと』

それから、数週間。

何度も言つが、今日俺は退院する事になつたのだ。

「そうか……それで、この後はどうするつもりなんだ？」

「今から高校に寄つて行きますよ。一応、この下には制服を着てますし」

主治医からそう聞かれ、俺は上着のコートを指差しながら答えた。
その格好は、普通に普段着を着ているように見える。けれども、
実はその下にはちゃんと制服を着ているのだ。

「とは言つてもなあ……もう、十時過ぎだぞ？ 今から行つても……」

「いいんです、別に。それに」

確かに、今から学校に行つても何もないかも知れない。

それでも、俺は

「それに？」

「……いえ、何でもないです。それじゃあ、長い間お世話になりました」

した

俺は、学校へ行く。

皆に元気な顔を見せるために。

何より……

兄ちゃん、元気出せよー。

私たちも頑張るから、あなたも頑張って下さい！

」の一人の言葉に、希望にしつかりと応えたいから

。

Fin.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8918r/>

けいおん！ Another Story SS

2011年3月24日23時55分発行